やるしかないでしょう。

みんなで決めてみんなですすむ 人間として・女性として、岡元かつ子さん

写真・文●松沢常夫

「最初、生協委託の仕事だけのときは60人が最大でした。そこは20人に減ったけど、豆腐事業を立ち上げ、お弁当、訪問介護、デイサービスと広がり、熊谷・妻沼にも拠点ができて働く人は130人を超えています。すごいでしょ」

生協物流もみんなの力で（岡元さん・1987年）

ヘルパー講座と結んだ「仕事おこし」の特別講義で、〝だんらんグループ〟のリーダーである岡元かつ子さん（57）は「すごいでしょ、すごいでしょ」と繰り返す。自画自賛なのだが、ちっとも嫌みがない。

「なぜそこまで」と教訓を聞かれても、答は「協同だからできたんです」というだけ。どうみても〝普通のおばさん〟という感じだ。

委託事業で全組合員経営

子育ても、食品づくりも、が生協

岡元さんは鹿児島市の西隣に位置する日置郡吹上町の山奥で生まれた。家は農家。父親は消防団長も務めていた。にぎやかなのが好きで、何かというと、人を寄せてはお酒を酌み交わす。とくに出初め式の日は、みんなを家に呼び、母親がつくったそばを振る舞い、祝うのが恒例だった。

そんななかで育った岡元さんが見合い結婚し、移住したのは千葉県船橋市。見ず知らずの土地だったが、生協の班で仲間ができ、長女が生まれると、楽しく子育てができた。

ところが、10年ほどして埼玉県比企郡嵐山町に家を建て引っ越すと、回りには何軒かの家がポツンポツンとあるだけ。この地で、9歳離れた長男が生まれた。この子のためにも生協の班をと、家が建つたびに、子どもがいそうな家かどうかをみながら訪ねていった。

班ができると、自宅を共同購入のステーションにした。1週間に1回の仕分け

作業は、子育て談義の場となり、どこかへ出かけるときは「いいよ、みててあげるよ」と、お互いに子どもを預けあう関係もできた。料理教室をしたり、クリスマスケーキを作ったりと、〝おいしいものを一緒につくるたまり場〟にもなっていった。

商品検討委員として、地元の零細業者を訪ね、安全・安心な食品づくりを依頼し、試作品を検討することも経験した。

「子育ても、食品づくりも、地域で支え合い協力しあっていくのが生協だ」

岡元さんはそう思っていた。

笑いが絶えない事業所委員会（1988年）

センター事業団は文句いう対象

子育てが一段落したとき、職場でも自分たちの力を発揮したいと考えた。しかしそこは、地域のように自分たちの思いをストレートにぶつけられるところとはとても考えられなかった。そんなとき、近くに生協の共同購入物流センターができた。1987年のことだ。

共同購入の各班への商品仕分けと配送を行う施設で、ここの業務の一部を労協センター事業団が受け持つことになった。

当時は人手不足の時代だったが、労協の30人枠に200人も殺到した。しかし、生協と労協の区別がつく人など皆無だった。岡元さんたちも生協パートの募集と思い、地域の生協組合員仲間5人で応募、面接の際にはこんな注文もつけた。

「せっかく5人で来たので、働けるのなら5人一緒にしてください。落とすのならみんな落としてください」

岡元さんたちは採用された。

「労協では〝雇う・雇われる関係〟はない。短時間就労でも、パートという〝部分人間〟のような働き方ではなく、組合員となり、主体者として働く」というような説明を聞いて、〝ここなら自分たちの意見もとりいれられるのでは〟という期待を抱くことができた。「よい仕事をし、よい地域をつくる協同組合間提携の事業」という話にも共感できた。

しかし、生協に雇われ、生協パートとして働く、ということと、委託を受けた労協で働くこととでは、かなりの違いがあった。

商品を棚からとり、コンベアを流れてくる箱に詰める作業は生協パートの人たち。その棚に商品を補充していくのが労協組合員の仕事なのだが、棚を境に補充の側は作業空間が冷蔵庫のなかのようになっている。冷凍室内の作業もある。労働条件が良くなく、重労働。

真っ先に吹き出した問題は食事。同じ食堂で昼食をとるのに、生協パートの人たちは生協の補助があって200円。事業団は500円。

「え～っ！おかしいじゃない！　私たちにも300円の補助をつけてよ。どうしてつけられないの。同じ協同組合じゃないの」

生協には主体者として加わり、創り、担ってきた岡元さんたちだが、「採用」された労協センター事業団は〝文句をいう対象〟でしかなかった。地域の必要に応える総合的な事業・運動の展開、そ

れを支える組織づくりなど、考えてもみない段階だった。

主体者への一歩一歩

こうした状況が変わっていったのは、一つには、労協らしさを追求した現場運営と会議の積み重ねによる。

2週間に1回、事業所委員を中心に職場会議が開かれ、全団員集会も月1回は開かれた。仕事の改善についてもみんなが考えられるようにと、〝冷蔵庫〟のなかでの作業、お米など重たいものを積む作業など15種類の仕事を2カ月間に全員が体験した。

会議では、労協とは、労協の働き方とは、ということが繰り返し話された。

〝パートで働くのになんで会議なんて必要なのか〟という人もいたが、ここで働く意義を絶えず問い返し、一人ひとりが働き方を文章にしたこともあった。「働く人たちが主人公になる」という考え方は、少しずつ理解されていった。

決定的なのは、センター事業団の本部スタッフと何でも言い合える関係がつくられていったことだ。

40歳前後で、同世代ということもあったが、事業所委員メンバーと永戸祐三専務（現在57）とは、会議の後、いつも呑みながらの〝延長戦〟に入った。その一端を日本労働者協同組合連合会の「日本労協新聞」（89年5月15日号。当時は「じぎょうだん」）が報じている。

先鋒は横倉しず代さん（その後、東京、東関東で介護分野の先進を開く）。

「15人でやる仕事を9人でやるような極限的な状況。あなたはそういう現実を知らないでしょ」

「現実か理想か、ではないの。自分たちでやろう！という軌道に立つかどうかだ」

「私なんか、余った時間を使って家庭を守るためにパートに出ているだけだもの」

「どうしてもっと本物になろうとしないの。『本当にこれをやりたい』といえば、夫も子どもも『がんばれ』といってくれるのでは」

「ただでさえ人が足りないのに、今度、小学校に入学する子をかかえた人には、送り迎えの時間を保障しなければならない。どうしてくれるの」

「そういう言い方はあまりにもさびしすぎる。みんなでささやかでも入学のお祝いをしよう、という話がまずあって、送り迎えのときの仕事の段取りはどうしようか、という話になるのが当たり前でしょ」

このとき岡元さんは、自分たちの現実を訴える横倉さんの話に〝その通り〟というなずきながら、永戸さんの話にも引き込まれるものを感じていた。

「冷凍・冷蔵庫の仕事で、ふだんでも人が足りないなかで休みがでる。残った人にふりかかる。だから文句をいった。だけど、永戸さんにいわれて、ああ、そうだなというのもあったんです」

現場では、この年、入学祝いに住井すゑさんの『わたしの少年少女物語』の本をプレゼントした。

岡元さんは、新しく入った人が子育てのことで休まなければならないとき、「大丈夫。みんなやりきってきたんだから心配しないで」と励まし、前からいる仲間には「子どもが小さいうちはしょうがないよ。そこはさ、みんなでなんとかがんばろうよ」と説得した。小さな子をかかえた人が休む時にあった、「まったくう！」という非難の言葉は、いつしかなくなっていた。

金銭に関する実務も分担

92年から金銭に関わる実務もみんなが責任を持ち、分担してやるようになった。このことが主体者意識を一段と高めた。

終礼時に、お互いに確認しながら、自分はどういう仕事で何時間働いたかを作業日報に書き込む。それを月ごとに班長がまとめ、会計担当が全体の表をつくる。これを契約書にある設定時間と比べると、どのセクションにどのくらいオーバー時間があるかは一目瞭然となる。作業日報ではまた、各部署の作業の流れも把握できる。これをもとにすると、問題点と原因の究明がしやすくなり、無駄な投下労働もなくせるようになった。

会計を担当するようになった大越ヨシさんは「お金の仕組みが見えるようになったら、いっぺんに事業所の運営が見えるようになってきた。こうすれば給料も上げられるんじゃないか、とか」と語っている。（「日本労協新聞」94年5月25日）

この結果、みんなが自分たちの部署の効率を気にするようになり、15人体制から17人体制にして「穴埋め」をうまくやれるようにする、早出をなくす、などの改善策を生み出し、原価率を下げ、わずかだが賃上げも実現することができた。

労協では「全組合員経営」ということがいわれていたが、誰かが作った「経理」を公開することにとどまらず、「私はこの仕事でこれだけの時間働きました」と情報として発信し、それを付け合わせ、運営や働き方、賃金も検討していったのだ。

こうしたことを「命令され」「やらされる」のであったら、〝なんでそんなことまで〟と反発されたことだろう。だが、そこでは「働く喜びが違う。責任を持つ働き方をするというのは、大変だけど、気持ちよかった」のだ。

そんな現場に変わってきたから、いいかげんな働き方をする人には、正面から対決できるようになった。

時間があれば、プラットホーム（トラックに商品を積み込む場）に座ってタバコを吹かしている男性の常勤者に腹が立ってきた岡元さんは、「そんな働き方はおかしい」と迫った。相手は「安い給料だから当然」と開き直る。

「なんなの！　男のくせに、ぐちゅぐちゅと。なんで会議の場でいわないの。まして、あなたたちは常勤でしょ。責任をもってここの仕事をしなくちゃいけないのに、おかしいじゃないのよ」

岡元さんが初めて怒鳴った場面だった。

93年から94年にかけては、労協が中心になって製作した映画『病院で死ぬということ』（市川準監督）の上映運動に取り組んだ。2回の上映会で800人を超す観客を集めたが、これは、みんながはじめて「外」に労協を語る場となった。

このとき、組合員にはチケットをまず3枚ずつ渡した。「1枚は自分、あと1枚家族に勧められれば上等、もう1枚他人に売れればもっといい」と言って。

「まず1枚がカギ。1枚でも売ろうとすれば、映画の内容もいわなければならないし、自分はこういうところで働いていて、こういう働き方だ、ということも話すことになる」――この狙いは的中、取り組んだみんなが労協センター事業団で働いていることに誇りを持つようになってきた。みんなが協力して一大事業をやりとげたことにより団結も強まった。

生協、障害者団体、保育団体などの方々と実行委員会を組み、50以上の団体を回り、たくさんのつながりができたことも、その後の展開を支える貴重な財産となった。

順風満帆、実は委託打ち切り

そうしたなかで93年11月、岡元さんが事業所長の任についた。本部から派遣された所長でなく、現場から生まれた

初めての所長だった。

本部から要請されたとき、「とんでもない」と断った。公務員だった夫からも「とんでもない」と反対された。夫には、働き始めるときでさえ、「家の食事づくりは手を抜かないこと」という条件をつけられていたのだ。

「旦那が認めない？　認めなけりゃ自立しなさい。『私、やります』といえばいいだけだ」

永戸専務にあっさりいわれると、「そんなこといったって」と弱々しく反論するしかなくなる。内心では、労協という組織は「口の立つ」人でなく、ひたすらまじめに働く自分のような人間を評価してくれるところなんだな、と、あらためて見直してもいた。

岡元さんは、「協力するから」という現場の仲間の声に押されるようにして決断した。

このころ、仕事も急増した。取り扱い品目が増え、2本だった仕分けラインが3本になり、産直野菜セット作業も新たに始まった。年間6000万円台で推移していた事業高は、93、94年と9000万円を超え、就労者も60人を超えた。

いよいよ全面委託が実現するかもしれない。そんな期待さえ感じられたが、事態は表面の流れとはまったく逆に動いていた。

生協は、不況の中で大きな生協との合併を決め、その前段階の品目合わせの過程で一時的に事業が急拡大したに過ぎなかったのだ。

94年の半ばから業務は縮小された。野菜セットはわずか1年でまた別の配送センターに移され、そこだけで14人工の仕事がなくなった。

「私たちは大変な仕事をみんなでがんばってやってきた。評価も得ていた。それなのに、なんで切られなくちゃいけないの。生協は経営が厳しいといったって、パートの人なんか、仕事が早く終わっても時間まで待ってタイムカードを押していたし、10年勤めたらハワイ旅行だったし。そういうのを見ていたから、よけい、〝ひどいじゃない〟と……」

しかし、所長としては、「ひどい！」といっているだけではすまない。

「協同組合だから、みんなで責任を負うということだけど、仕事がなくなるときの所長というのは、やっぱし、この人たちをどうしよう、どうしようと。それはすごい責任を感じましたね」

そんな思いのなかから、今度は、切られることのない自前の仕事、自分たちがやりたい仕事を自分たちでおこそう、という声が出始めた。

これまでもセンター事業団本部から「外に出て仕事を増やさなければ」といわれ続けていたが、岡元所長は「今でも精一杯。外に出て仕事をとってくるなんて、とても考えられない」と、聞き流していた。仕事が切られることになり、〝まじめに働いて小遣いかせぎができればいい〟というレベルに止まることができなくなってはじめて、仕事おこしを考えるようになった。

地域全体視野に自主事業

ある日、シーンとなり、「白紙に」

もともと、生活者としては、地域に根付いている女性たちだ。いざ仕事をおこそう、となると、「喫茶店」「お惣菜屋さん」「お弁当屋さん」「老人給食も」と、自分たちでできそうなものが出てくる。「夢として」ということだったが、「ヘルパーなども」と、地域の生活全体が視野に入れられていった。

たまたま、長野県北御牧村の主婦た

ちが1万円ずつ出資して村おこし事業として始めた豆腐づくりが順調だという情報を得、希望者8人で訪問した。国産大豆で、本当においしい豆腐。隣り町からも買いに来る。1日に600丁を売って20人ほどが給料を得ている。

「おいしいもの、いいものをつくれば、やっぱり買ってくれる人はいるんだ！」

岡元さんはそう直感した。それは、本物、まともなものを子どもたちに食べさせたいと、生協運動をやってきた人からすれば当然の生活感なのだろう。

北御牧の人たちからは「豆腐づくりは、にがりの打ち方だけ覚えればできる」「あなたたちは協同組合だからもっといっぱい力が出せる。きっともっといいものができる」と励ましてもらえた。

帰りの車中では、見学者全員が「これならできる！」と興奮していた。

4時に仕事が終わってから「新しい仕事をおこす話し合いの場をもちます」と呼びかけると、ほとんどの組合員が集まってきた。

「これならやれる、これをやろう！」熱のこもった提起に、出る意見も前向きだった。「ニーズはあるのか」「大豆はどうするのか」「お店はどこにつくるのか」。質問も次々に出た。

何回か会議を重ね、「赤ちゃんからお年寄りまで食べられる、昔ながらのお豆腐」というコンセプトも決め、当初の経費見込み800万円のうち200万円は自分たちで出資し、あとの600万は積み立てたお金と本部からの借り入れでまかなう計画も立てた。出資は平均すると、1人3～4万円になる。「1万円くらいだったら出しやすい」という意見も出たが、「みんながこのくらい出そうというところまで意思統一できないと成功しない」ということで、200万としたのだ。

ところがある日、会議が始まると、みんな黙っている。

「どうしたの？」

岡元さんが声をかけるが、シーン。

「何があったの？」

重ねての問いかけに、「じつはね」と、一人が打ち明けた。

「みんなでよく考えたんだけど、これだけのお金をかけても、どれだけニーズがあるか。もし赤字になったら誰が責任を持つのか。もう一回、白紙に戻して考え直した方がいい、ということになったのよ」

「えっ！　何？　なにいってるのよ。ここまで話し合ってきたのに、何なのよ！やるしかないよ」

しかし、みんなはまた黙ってしまった。

岡元さんにとっては、まさに寝耳に水だった。

〝やっていくっきゃない〟と突っ走る岡元さんの前では本音を出せなかった人たちが、会議が終わってから「ほんとにだいじょうぶなの」と不安を口にすると、「赤字になったら…」「やっぱり無理なのでは…」という方向に傾いただけなのだったが、岡元さんは〝自分をはずしたところでそんな話し合いをしていたのか！〟と、ショックだった。労協は仕事おこしの協同組合だ、といっても、みんな初めての経験。だれしも躊躇する。しかし、リーダーも一緒に不安がっていたのでは何事も始まらない。

〝もうだめかもしれない〟という思いが頭をかすめたが、〝やるしかない！〟と意を決し、「赤字になったら、私が責任を持つ」とも言い切った。

ようやく、一人が口を開いた。

「もしこのまま仕事が切られて、みんながばらばらになって、はい、さようなら、となったら、もう一回仕事をおこしたい、という思いになったとしても、もう集まりっこないよね。せっかくここまで話し合いをしてきたんだから、やっぱり、もう一

回、やる方向で話し合おうよ」

北御牧村に行った仲間の一人で、大越さんだった。〝ああ、よかった！〟岡元さんは正直、そう思った。流れは決まった。〝やっぱりこのままじゃいけないよね、踏ん切らなきゃ〟と。

岡元さんには、うれしいこともあった。夫が豆腐への挑戦には両手を上げて賛成してくれたのだ。それも、言葉だけでなく、自家製豆腐を作る木箱とにがりと大豆を買ってきてくれたのだった。にがりも大島の海精にがりがいい、と調べて、取引先への連絡までしてくれた。

「その点ではすごい」

初めて夫を誉める言葉が出た。岡元さんはニコニコしていた。

つるつるピカピカと光る豆腐

吹っ切れると、どう成功させるか、という前向きの話がどんどん進んだ。

「私も50枚だったらチラシを配れるよ」

「1万円だったら出資はできるよ」。

知り合いの生協組合員にも協力をお願いすると、5万、10万と出資してもらえた。200万は、またたくまに集まった。

種大豆は北御牧の方から分けてもらい、種まきから自分たちでやることにした。

組合員の中西千恵子さんが「家の畑を」と申し出てくれた。JAで借りたトラクターで、中西さんのお父さんに耕してもらった。

大変だったのは草取りだ。ちょうど暑くなる初夏。生協現場が終わって4時過ぎから毎日60人がそろって3時間汗を流した。しかし、1週間かけてやりあげたと思うと、また草が生えている。

指導をお願いしたJAの人から除草剤をまくようにいわれたが、「私たちは無農薬でこの大豆を作りたいんです。それが自分たちの豆腐作りの目標なんです」と拒否した。

JAの人はあきれて、「好きにすればいいよ」といいつつ、「畦を作れば、どんどん大豆が茂る。影ができてきたら草も生えなくなる」と教えてくれ、畦を作る小型トラクターも貸してくれた。

素人だから200キロもとれればいい、といわれたが、収穫は450キロ。それ以後は、この大豆で、地元の農家に栽培してもらうことにした。もちろん低農薬で。

豆腐づくりの指導には、機材会社の人が10日間も泊まり込みで来てくれた。

にがりの打ち方は1人にしか教えてくれない。「野菜の仕事がなくなって、時間が空いてたから」という高山恵津子さんが担当したが、短期間に覚えなければならない。「お豆腐が固まらなくて、どうしようどうしよう」という夢をよくみた。岡元さんも同じ夢をみた。

〝おいしい〟と思えるのに、〝まだだめだ、捨てろ〟といわれたときは、もったいないからと、ボールに入れ、「試作品ですけど、食べてみてください」と、地域に宣伝しながら配った。

「〝これでいい〟といわれた豆腐は、クリーム状で、つるつるピカピカと光っていて、包丁を入れてもまた元に戻る感じで、味わったことのない甘さがあったんです」

95年6月、とうふ工房「ワーカーズコープ愛彩」がスタートした。

高齢者の自立支援広げ

高齢者への配食で実態知る

事業計画を広く描き、その第一歩をみんなで実現した。その自信があったから、次の事業展開はごく自然に進んだ。

とうふ工房は手狭になり移転。以前の場所は、高齢者への配食サービスもす

る「愛彩弁当」の店にした。オープンは97年2月。

配達すると、「よく来てくれた。まあまあまあ、お茶をのんでって。上がって上がって」と、いろんな話をもちかけられる。

「すみませんね。次の配達があるんです」

そういうと、がっかりされ、「そうかあ」と、門まで追いかけてくる。誰とも会わずに1日を過ごす高齢者がめずらしくないのだ。

「体の具合が悪いので、洗濯をしてもらえないか」というような話もよく聞いた。部屋の中が散らかり放題、という家もある。

会えば、いろいろと頼みごともしてくる高齢者だが、自分から弁当を注文してくることはまずない。大きな農家に人暮らしか老夫婦だけ。「どういうものを食べてるかわからない。1食でもきちっとしたものを届けてくれないか」と、子どもからの注文なのだ。高齢者はどんなに困っていても、がまんしてしまう。自分たちから発信しようとはしない。

「この人たち、倒れたり、何かあったらどうなるんだろうね」「もうちょっと関われる仕組みをつくりたい」「やるしかない」

こうして、ヘルパーの仕事に進むことになった。

殺到したヘルパー講座受講生

98年1月、最初のヘルパー講座（3級）を開いた。

労協全体では、「市民自身が地域福祉の担い手に」と呼びかけ、94～95年からヘルパー講座を開きはじめていたが、まだ介護保険は始まっておらず、「講師をどう集めたらいいのか、会場をどうしたらいいのか、何をどこからどうやったらいいのかが見えなかったし、受講生が集まらなかったらどうするのかとか考えて」踏ん切れなかったのだ。

「ん？　何をいってるんだ、集まらなかったら、できないだけだろうが」

永戸専務にまた、あっさりとかわされ、逃げられなくなる。

一旦決まったら、猪年の岡元さん、本領発揮だ。まず県に電話し、どうしたらいいかを聞いた。近くの地方庁舎を訪ねると、一般市民がヘルパー講座を主催することなどなかったので、「すごいですねえ」と感心。後日、「がんばって」の言葉を添えて、書類が送られてきた。

深谷市と社会福祉協議会では、「地域の高齢者を支える役割をもつヘルパーになるのだから、市民が受講しやすいように補助金を出してほしい、会場確保に協力してほしい、広報に掲載してほしい、講師になってほしい」と要請した。

広報での紹介と講師は引き受けてもらえたが、担当者は「2万5000円もの受講料を出して受ける人がいるんですかねえ」と首を傾げた。それは、実は、岡元さん自身の不安でもあった。

ところが、受付を開始すると申し込みが殺到。電話は一本しかないので話し中となる。市から「どうなっているのか」

ヘルパー養成講座では永戸専務の特別講座も

と問い合わせがきた。広報にのった関係で、市にも苦情が相次いだらしいのだ。申込者は、30人の定員に対し200人近くに達した。

この年、3級を2回、2級を1回開き、99年に入って2回目の2級講座を開いたときは、最初から、「みんなで事業所を立ち上げよう」と訴えた。

「協同組合は人に命令されたりするのではなくて、一人ひとりが意見を出し合ってつくりあげていくところ。働くことの中身、仕組みから自分たちで考え、話し合うから、責任をもつし、いいものになっていく。それが一番理想的な働き方。みんなの力を出し合えばできる。仕事を他に持っていてもいいから、ぜひ登録して」

これまでの経験があるだけに、実感を持って伝え、呼びかけることができた。

「すごいのよ、すごいのよ」

99年5月、「ヘルパーステーションだんらん」の立ち上げには、30人の受講生のうち20人が加わった。

介護保険が始まっていないこともあり、高齢者の介護だけでなく何でもやります、と打ち出し、みんなで1万3000枚のチラシを配ったが、ほとんど仕事はこなかった。

当然にも、〝どうしてくれるのよ、仕事がこないじゃないのよ〟という話になってきた。

しかし、岡元さんはもう揺るがなかった。

「絶対私たちを必要とする人たちが地域にはいるはず。社協のヘルパーさんだけでは、困ってる人たちの対応はできない。家事ができない人もいる。子育てで困ってる人もいる」と繰り返した。

そして、「協同組合なんだから、〝どうしてくれるのよ〟ではなくって〝どうすればいいのか〟考えよう」と提起し、「もっと地域の人に知らせなければいけない。じゃあ、どういうところをまわればいいのか」と投げかけた。

行政、民生委員、病院、訪問看護ステーション、薬局などにもっと顔を出そうということになった。

『病院で死ぬということ』上映の際につながりができていたこともあって、病院はずいぶんまわった。産婦人科では、産後のお手伝いができたらといって、チラシ、ポスターを置かせてもらった。

00年4月、介護保険スタートに当たっては、「来た仕事は一切断らない」ということを確認した。それには、利用者の多様なニーズに応えきれるだけの人数、「この時間ならできる」という人がたくさんいなければならない。「1週間に1回1時間だけならできる」という人も含めて、200人の修了生にあらためて就労契約を呼びかけることにした。

そこで、同窓会とあわせて、新井家光市長と羽田澄子監督との対談を企画、「深谷の福祉を考える『映画とトーク』の集い」も開いた。

介護の依頼はどんどん来た。資格を得たばかりのみんなは不安だらけだ。

ヘルパー講座は修了式を迎えるたびに手料理でお祝い

岡元さんは「大丈夫、大丈夫。数をこなせば慣れてくる」の一点張りで励ました。

「でも、大変なのよ、大変なのよ」という人がいれば、ああ、いつも自分が本部にいっていた言葉だな、と受け止めながら、「とりあえず私が行くから」といって、こうすればいい、というものをつかみ、次からは入ってもらうようにした。

実際、やりはじめると、利用者から喜ばれる言葉がすぐ返ってきた。

だんらんでのヘルパー講座では、毎回、永戸専務らの特別講義が組まれた。岡元さんも、労協の説明をし、短時間就労の人にも、「働き方は協同組合なので、出資金が必要だ」と最初に訴え、組合員になってもらい、毎月の定例会議やケース検討会を通じて、労協の働き方をしっかり受け止めてもらうようにしている。

だから、新しく入ったヘルパーは、「先輩たちが苦労してやってきたことがつながって今があるのね」と、いってくれる。

ヘルパーは自宅と利用者宅との直行直帰ではなく、できるだけ事務所に立ち寄ってもらう。

「いいことがあったらみんなに伝えてね。つらいときは家に持ち帰らないで、必ず事務所に来て、はきだしてね。じゃあどうすればいいかってのはみんなで考えればいいことだから」といって。

そんなふうにしているから、毎月夜7時からなのだが、定例会（土曜夜か日曜昼かどちらか）にはほぼ全員が集まる。いいことも悪いことも、そこで話し合えるから、いいケアにつながっていく。随時開くケース検討会も大事にしている。

岡元さんが本部のメンバー相手に口にする言葉は、「すごいのよ、すごいのよ」に変わった。

痴呆症状があり、24時間ベッドにしばられ、お腹に穴を開けて点滴で栄養をとっていた方が、退院1週間後に「普通の人みたい」になってしまった例、医者も処置をあきらめた〝死が目前〟の人が数ヵ月で普通の生活に戻ったという例などが、ヘルパーの関わりのなかで生まれてきたのだ。

大家さんたちも共感し協力、参加

1年後、01年7月には「デイサービスだんらん」を立ち上げた。

地域の人たちが歩いてこれる場に、あったかい家庭的なデイサービスをと、撤退したセブンイレブンのお店を借りた。人通りが多く、広い駐車場もある。1階をデイサービスと配食、2階を訪問介護のステーションにした。ここのデイサービスでは、利用者が利用者を呼んでくる。おしゃべりをし、仲間ができ、利用者が主体になり、得意なことを披露して、〝先生〟になったりもする。だから、どんどん元気になる。

こうした施設づくりでは、大家さんの協力もある。

「だんらん」の家賃は最初、45万円といわれた。「地域のお年よりが住み慣れたところから歩いてこれるような場所でデイサービスを始めたい」という話をすると、不動産屋さんも「わかりました。では、一緒に大家さんのところへ」となり、大家さんに話すと、30万で、ということに。なんとか採算がとれるので借りた。

03年5月に妻沼町でデイサービス「ほほえみ」を立ち上げたときも、所長になる吉川千恵子さんらが「ほんとにお金がないんですけど、だめですか」というと、大家さんが「それじゃ、いくらなら出せるのか、みんなで相談しておいで」といってくれ、こちらが示した額でOKとなった。改装も大家さんの費用でやってくれた。

アメリカのAARP（全米退職者協会）からもお客さん

この大家さんは開所式で「利益が目的ではなく、みんなでお金を出し合ってやっているというし、私も近所の人たちにお世話になってるから、これは応援しなけりゃあ、という気になったんです」とあいさつした。

麦畑の中の資材置場だった建物に「とうふ工房」を移転したときも、4、5人の女性たちが思いを伝えると、家賃は事業が軌道に乗るまで待つので、1年10ヵ月後からの支払いでいい、改装費はいらない、といってくれた。

ヘルパーたちが〝自分たちの事業〟をする、というのでは市民は協力してくれない。この事業が何のためにあるのか、市民との接点でどういう意味をもっているのか、こういう事業が広がったらこの地域はどう変わるのか、そこを誠心誠意語り、やる気が通じたとき、広い市民の共感とさまざまな形での参加が実現し、資金も調達できていった。

会員制の生きがい活動の場もある「だんらん上柴」も昨年暮れにオープンした。ヘルパー講座修了生はもうすこしで1000人に達する。

「やっぱし、思っててくれてたんだ」

かつて、「余った時間」だけ働いていた女性たち。今では、朝早くから夜遅くまで動き回っている。夫との関係はどうなったか。

「生協の仕事をしていたときも、自分たちでシフトを組み立てるようになってきたら、みんな、ご主人に対して、自分はきちっと働いてるといえるようになった、といっていました」

岡元さん自身も「前は、〝まったくう！〟と腹をたてながら、いわれるままにしてたけど、だんだん私の勢力が強くなって、〝冷蔵庫あければ材料はあるんだから、自分でつくればいいじゃないか〟といえるようになったし、今はもう何もいわれない」

偏頭痛がして、「とにかく納豆ごはんで食べてくれ」といって、そのまま布団に入ったことがあった。何か気持ちがいいと思ったら、夫がこめかみをもんでくれていた。

「娘から『お父さん、すごい心配してるんだよ』って聞いて、うれしくなって。ああ、やっぱし、思っててくれてたんだって」

今の苦労は、自分たちが年をとったとき、本当に安心して暮らせる地域にしていくためのものだとも思う。

「地域の必要性をもとに事業計画を立て、いろんな人たちに訴えていけば、自分たちで拠点をつくれる。雇用を待っているだけではなくて、自ら地域で拠点を作って頑張ることができる。こういう地域福祉事業所を一つといわずに、またもう一つと頑張っていきたいなと思っています。当面、中学校区に1カ所の地域福祉事業所が目標です。清掃の仕事、障害者支援、子育て支援もぜひやりたいと思っています」

特別講座での、岡元さんの話はいよいよ波に乗ってきた。

市民の協同の力で 地域ひらく

地域福祉事業所

深谷だんらんグループ

FUKAYA DANRAN

発行日 2005年3月5日 第一刷発行
定価580円（本体552円+税）

発行人――永戸祐三
編集人――松沢常夫・飯島信吾
編集協力―シーアンドシー出版
デザイン――六月舎

発行
日本労働者協同組合連合会センター事業団
〒170-0005 東京都豊島区南大塚2-33-10 東京労働会館
TEL.03-5978-2180 FAX.03-5978-2184